

広島乳幼児サークルの立ち上げ

今年度一年間の連載を担当します、広島乳幼児サークルです。広島県には全国障害者問題研究会（以下全障研）の支部サークルが5つあります（図）。乳幼児サークルの発足は、2012年、広島で全障研の全国大会を開催したのがきっかけとなりました。

全障研全国大会の準備を進めていくなかで、発達保障の考え方とは異なる療育の個別的な手法が導入されるようになっていた現状に、療育センターに関わる職員の中でも危機感を感じていました。発達保障の考え方を基盤にした療育を根付かせるために、発達保障の学習は不可欠と考え、広島市を中心とした広島サークルから分離して乳幼児サークルを立ち上げ、その趣旨に応じたとりくみを検討しました。年間のとりくみは図を参照ください。

この連載では、「保護者と共にとりくんだ運動」「広島の療育の柱」「これからの療育の課題」などをお伝えします。

子どもやお母さんたちに教わる療育の歩み

この連載の初回を担当する私は、元々、広島市立の保育園に20年勤務していました。その間、障害のある子どもたちが保育園に入園するようになり、障害の理解や保育に悩み、

動になりました。北部子ども療育センターは、知的障害児通園施設と肢体不自由児通園施設の二つが一体となって運営されており、さらなる学びの多さに当分目を白黒させていたと思います。

ある日親子での散歩に同行しました。季節の木々や花々、川の音、風のそよぎを五感で感じながら、お母さんたちの優しい声かけでいっそう散歩が楽しくなります。「この土地、空いているんかね？ いい場所じゃね」「ここに将来建物を建てて、子どもたちが一緒に暮らせたらいね」と、将来の子どもたちの生活を想像しながらの、お母さんたちの会話が行き交ったのです。お母さんたちへの研修シリーズに「小さな目と大きな目を持つ」というテーマがあります。日々の生活を見ていく小さな目、将来を見ようとする大きな目、どちらも大切な目で、お母さんたちは学んだことをきちんと心に刻み、わが子と向かい合っていることに感動を覚えました。

もちろんこの二つの目は職員にも必要です。療育や子育て、地域の生活が充実していくように心に刻み、お母さんたちと一緒に学び歩んでいけたらと思います。

定年退職後は、一年間区役所の保育園相談窓口勤めた後、相談支援事業所「相談ルームはるにれ」の相談員として勤務し、現在に

仲間がいっぱいひろしまの療育

この連載では、全障研広島県支部広島乳幼児サークルのメンバーが、乳幼児期の療育で大切にしてきたこと、保護者と共に運動してきたことなど、ひろしまの療育についてお伝えします。



第1回 広島乳幼児サークルの誕生とこれから

広島乳幼児サークル会長 石木恵子

療育センターで学ぼうと異動を希望し、二葉園（広島市東区、肢体不自由児通園施設）に配属になったのが1993年のことです。初めて見聞きする専門用語（医療用語も含め）や子どもたちへの理解、介助の仕方など、医療の職員や若い先輩保育士、お母さんたちから教わることで精一杯、目の前の仕事をやっとのことになす日々でした。

二葉園には6年間勤務。その間に、誤嚥が原因で命を亡くす子どもたちがおり、悲しみやつらさが今でも思い出されます。当時の給食の形態は食物の大きさを刻んだ程度のものでした。安全に食べられるようにセラピストと協議して、職員が抱っこ姿勢で苦心しながら食べさせていました。食べる楽しみを共有する余裕もなかったと思います。

今では、療育センター内（3センターのうち給食の直営を維持している1カ所のみ）の給食担当の栄養士さんが研究し尽くした、一人ひとりに応じた形態の提供のみならず、「食べる」ことの大変な視点をお母さんたちに伝え、家庭でも汎化できるようにとりくみができています。しかし、この大事なとりくみを維持し、さらなる充実のためにはお母さんたちとの運動が必要です。

1999年、北部子ども療育センターに主任という立場で、プレッシャーを抱えての異

至っています。相談員となり、療育センター勤務時代のお母さんや子どもたち（すでに成人している方もいます）に出会い、なつかしみながらも、それぞれに年を重ねられてのちがった悩みを一緒に考えています。相談員として未来を見据えた内容が提供できるように、さらなる学びが必要と感じています。

乳幼児サークルの現状と課題

現在、乳幼児サークルの事務局員（療育センター現役職員と元職員で構成）は20名ですが、産育体中、子育て真っ最中、仕事の調整ができていくなどさまざまな理由で、稼働できているのは多い時で10名弱くらいです。新型コロナウイルス禍で集合できないこともありましたが、120名の会員のみなさんにとりくみを伝える通信を絶やすまいと3名で作業をしたこともあります。月1回の事務局会議は、それぞれ仕事終わりの平日の18時から20時30分（借りている施設の閉所時間）で行ないます。通信の印刷、発送の準備などの作業に追われ、次回の会議の調整で終わってしまう会議が続きました。

この現状を見直し、会議当日までに通信の原稿が仕上がるように努力し、早く集まれる人で通信発送作業を手掛け、立ち上げ当初の会議の形である職場の悩みを語り合い、社会

図 全障研広島県支部のサークル

